

終章 日中共存を求めて

世界トップレベルと差のある中国

中国の科学技術力を世界トップレベルの施設やビッグプロジェクト、さらには中国の科学技術全般の特徴を概観してきた。現時点において中国は、欧米流の科学技術の歴史、経験、蓄積などが浅く少ないために、米国や欧州、さらには日本の後塵を拝している。科学技術の面でも中国は遅れてきた巨人であり、まだキャッチアップの途上にある。しかし、巨大な科学技術のポテンシャルは、将来の科学技術大国・強国を予感させる。

日中協力の意義

では、日本はこの国とどのように向き合うべきか。現在の経済成長が順調に継続すれば、中国は今世紀の比較的早い時期に世界のスーパーパワーとして発展し、科学技術についてもフルセットの政策を推し進める体力のある国となる。つまり、科学技術の全分野において、単独で米国や欧州主要国と競争していくことになり、中国の歴史や人口からしてそのような潜在的な能力があることは明白である。

このような将来が展望されるなか、中国にとって日本との協力でどのようなメリットが考えられるか。施設や装置そのものの外形的な性能は確かに世界レベルに近づきつつある。しかし、それを使いこなすとなると、現時点で直ちに世界と互角に競う状況になく、日本にもまだ後れている部分も多い。したがって当面、日本と研究開発協力や人材交流を進めることは、中国にとって意義がある。

一方、日本にとって、中国と科学技術協力を行うことのメリットは、何といても人材であろう。少子高齢化が加速度的に進展している日本では、優秀な研究人材をこれまでのように維持確保していくことは、非常に困難になることが想像される。中国と研究協力や人材交流を進めるといって、技術流出や国内人材の空洞化といった懸念を指摘する向きもあるが、そのような懸念を考慮しても、日本が科学技術一流国としての地位を維持・確保するためには、研究者数を一定の水準以上で確保し続けることがきわめて重要である。また、科学技術の出口である産業化、イノベーションを考えた場合に、巨大な人口を擁する中国の市場は魅力的である。

さらに、中国人の経済的センスは日本人を遙かに凌駕している。技術的な観点から見ると乱暴な部分も見受けられるが、中国式のあり方は結果的に商売に結びつき、さらに技術開発投資にもつながっていく。他方、我々日本人の技術に対するこだわりも世界有数である。したがって、日中両国民がそれぞれの長所を生かし、うまくタッグを組むことが出来れば、十分にウィン・ウィンの関係となりうるはずだ。

恐れてはいけないし、侮ってもいけない

2012 年秋に発生した沖縄県尖閣諸島問題を契機に、日本と中国の関係は一気に冷え込んでしまった。残念なことであるが、科学技術もまた政治、経済、社会などの影響を受ける営みである以上、今後協力が停滞するのはやむを得ない。

しかし尖閣問題があるからといって、日中間の科学技術協力を長期間にわたり中断したり棚上げにするべきではない。40 年前の日中国交正常化の際に、周恩来元総理が言った「小異を残して大同につく」という言葉を、改めて噛み締めなければならない。中国を恐れてはいけないし、侮ってもいけない。等身大の中国と正面から向かい合い、対等な関係を維持しつつ、相互の平和と繁栄を模索すべきである。

現在の中国は共産党一党支配国家であり、民主主義国家である日本とは違う。また、太平洋戦争終結までに日本が中国に犯した行いの責任は非常に重く、今回の尖閣問題で噴出したように当面は日中間の足かせとなるであろう。しかし、それでも日中関係は重要であり、これなくして日本の将来は危ういという気構えで協力を進めるべきである。